

北海道開拓の歴史と年表

おもに、明治から大正期にかけて北海道開拓の村に関連する北海道の出来事と開拓の村建造物にまつわる出来事を年表にしています。

年号（西暦）	北海道の主な出来事	開拓の村建造物にまつわる出来事【関連建造物名】	開拓の村建造物建築年代（竣工年）
安政4（1857）年	徳川幕府が八王子千人同心に命じて桑苗を道南の七重に移植したことで道内の養蚕が始まる	【旧福士家住宅】福士成豊は父とともに日本人が建造した最初の洋式帆船となる「箱館丸」を完成。2年後には2隻目の箱館型帆船「亀田丸」を建造（建造は父の功績で、成豊は手伝い）	
江戸時代末期			旧若狭家たたみ倉
明治2（1869）年	7月：開拓使を設置し、開拓督務鍋島直正を開拓使長官に任命 8月：蝦夷地を北海道と改称し11国86郡を置く 9月：開拓使、場所請負制を廃止する		
明治3（1870）年	2月：樺太開拓使を置く 4月：仙台藩亙理伊達家の十五代当主伊達邦成、旧家臣220名を率いて管轄地有珠郡へ移住（第1回）、以後明治14（1881）年4月（第9回）まで移住者2,600人余りに達する 5月：兵部大丞黒田清隆、開拓次官に任命され、樺太専務を命じられる 10月：東京開拓使庁を廃止、函館出張所に本庁設置	【旧青山家漁家住宅】青山留吉はニシン刺網20枚、磯舟2隻、川崎舟1隻を保有してニシン刺網漁の操業を開始	
明治4（1871）年	1月：黒田次官、山川健次郎ら留学生3人を伴い米国へ出発（黒田はケプロンの招へいを決めて6月に帰国） 判官の岩村通俊は、人工川の太友堀（創成川）沿いの地点（今の札幌市中央区南1西1）を「基点」を定め方形格子割の町を四方に作る計画で工事を進める 4月：札幌に開拓使仮庁舎建設 5月：札幌に開拓使庁を置き、函館・根室の各開拓使出張所をそ	【旧武岡商店】武岡清吉は稲田家家臣団総勢546人の一員として静内に移住 【旧福士家住宅】福士成豊は開拓使御雇外国人アンチセル・ワーフィールドの実地調査の案内役を担う 【旧開拓使工業局庁舎】開拓使は札幌本府建設のため創成川東に貯木場を備えた工作所を設置し札幌開拓使庁管轄掛が所管。2年後の組織改正により工業局へ	

	<p>れぞれ出張開拓使庁と改称</p> <p>7月：ケプロン、アンチセル・ワーフィールド・エルドリッチらを伴い来日。廃藩置県の詔書が出される、館藩は廃止され、館県が置かれる。</p> <p>9月：開拓使、東京府下に第1・第2・第3の官園を設置（以後、道内にも官園や牧場を設置）</p> <p>長官、次官連署で札幌建府を太政官に上申</p> <p>開拓使は札幌郡丘珠村、亀田郡大野村に養蚕施設を設ける</p>	<p>【旧岩間家農家住宅】岩間弥之助が、旧仙台藩亙理領から第3回移民団の一員として現在の伊達市弄月町に入植</p>	
明治5(1872)年	<p>1月：開拓使、10ヶ年間定額1,000万円による開拓計画の実施（開拓使十年計画）</p> <p>開拓使付属船樺戸丸の船長蛸子は、船艦用の北海道旗章にと、北極星をかたどった紺地に赤く五稜星を染め抜いた図案を開拓使に示し採用される</p> <p>9月：札幌開拓使庁を札幌本庁と改称</p> <p>開拓使は札幌本府の市街に「北海道国郡名」の町名を付与</p> <p>私設消防組「中川組」が組織され、札幌市消防の始まりとなる</p> <p>近代郵便制度が施工され道内で初めて函館に郵便役所が設置される</p>	<p>【旧開拓使札幌本庁舎】開拓使札幌本庁舎建築着工（7月）</p> <p>【旧福士家住宅】福士成豊は日本最初の官業として気象観測を開始（函館）</p> <p>【旧札幌農学校寄宿舎】札幌農学校の前身となる開拓使仮学校が東京に設置</p>	
明治6(1873)年	<p>6月：亀田－札幌間の新道完成（札幌本道）</p>	<p>【旧開拓使札幌本庁舎】開拓使札幌本庁舎竣工（12月）</p>	旧開拓使札幌本庁舎
明治7(1874)年	<p>10月：屯田憲兵例則制定</p>	<p>【旧開拓使札幌本庁舎】開拓使札幌本庁舎開庁式挙行（1月）</p>	
明治8(1875)年	<p>5月：宮城・青森・酒田3県および道内から、最初の屯田兵198戸965人が琴似へ入地し、第1大隊第1中隊を編成</p> <p>長官黒田清隆は、屯田兵が養蚕を進める計画の一つとして、札幌と函館の桑畑の整備を旧荘内藩に要請、同年6月から札幌中央区北1西8～9あたりに設置した養蚕場の西側の開墾に取り掛かる</p>	<p>【旧福士家住宅】福士成豊は函館から札幌へ移住</p> <p>【旧札幌農学校寄宿舎】開拓使仮学校は札幌に移り札幌学校と改称</p>	
明治9(1876)年	<p>開拓使は、マサチューセッツ農科大学学長のW・S・クラークを</p>	<p>【旧武井商店酒造部】武井松兵衛は武井家より分家し、荒</p>	

	<p>招聘</p> <p>6月：クラークは教え子のW・ホイラーとD・P・ペンハローを伴い来日</p> <p>8月：札幌農学校の開校式挙行（札幌学校からの正式改称は9月、教頭W・Sクラーク）</p> <p>9月：開拓使建設の麦酒・葡萄酒両醸造所、製糸工場が完成し、開業式を行う</p>	<p>物海産の販売や回船業を営む</p>	
明治10（1877）年		<p>【旧開拓使爾志通洋造家】爾志通洋造家の建築が始まる（6月）</p>	<p>旧開拓使工業局庁舎</p>
明治11（1878）年	<p>1月：北溟社、「函館新聞」を創刊（最初の道内発行新聞）</p>		<p>旧開拓使爾志通洋造家</p>
明治12（1879）年	<p>12月：幌内炭鉱開坑</p>	<p>【旧開拓使札幌本庁舎】開拓使札幌本庁舎、午後7時50分頃出火し、金庫・湯呑所、訴訟人控所を除き焼失（1月）。旧女学校（南1条西3丁目）を仮庁舎として事務取扱。</p>	
明治13（1880）年	<p>11月：手宮一札幌間に鉄道開通、運転式を挙行</p>	<p>【旧浦河公会会堂】鈴木清が神戸で北海道開拓会社「赤心社」を結成し、初代社長となる</p> <p>【旧札幌停車場】初代札幌駅が建設される</p>	
明治14（1881）年	<p>8月：天皇、小樽・札幌・室蘭・函館など道内を巡幸（～9月）。札幌に豊平館完成し、天皇の行在所となる</p>	<p>【旧開拓使爾志通洋造家】札幌農学校第1期生で開拓使職員の大島正健が、官舎の一つ「洋造5号官舎」の払い下げを受け、2階を札幌独立基督教会創立時の仮会堂とする。（9月）</p> <p>【旧開拓使工業局庁舎】開拓使工業局は工業課と改称</p> <p>【旧浦河公会会堂】「赤心社」は第1回の移民として50余名を浦河西舎村に入植させる（翌年には80余名が元浦河地区に入植）</p> <p>【旧札幌停車場】2代目の札幌駅舎を新築（竣工12月、開業は翌年1月）</p>	<p>旧山田家養蚕板倉（明治14年頃建築）</p>
明治15（1882）年	<p>1月：黒田清隆、開拓長官を免じられ内閣顧問となる。農商務卿西郷従道、開拓長官兼任となる</p>	<p>【旧河西家米倉】河西由造が、長野県から北海道に渡り、翌年厚別に入植</p>	<p>旧岩間家農家住宅（明治15年頃建築）</p>

	<p>2月：開拓使を廃し、函館・札幌・根室の3県設置。官営事業などは各省へ移管</p> <p>11月：幌内鉄道（手宮—幌内間）全線開通し、札幌—幌内間汽車運転式を行う</p>	<p>【旧信濃神社】当年以降、長野県諏訪郡からの移住者が、小さな祠を建てて祀る（厚別川と三里川の堤防近く）</p> <p>【旧武岡商店】武岡清吉が東静内（旧摺別）に荒物雑貨店を開業</p>	
明治16（1883）年	<p>1月：農商務省に北海道事業管理局を置き、旧開拓使の官営事業を所管する</p> <p>晩成社が十勝に移住</p>	<p>【旧河西家米倉】厚別地区での稲作が長野県からの移住者によってはじめられる</p>	
明治17（1884）年		<p>【旧浦河公会会堂】赤心社が私立赤心学校（後の荻伏小学校）を創立</p>	旧手宮駅長官舎
明治18（1885）		<p>【旧北海中学校】北海英語学校開校</p> <p>【旧札幌警察署南一条巡査派出所】札幌創成川のたもとに交番が建てられる</p> <p>【旧三河本そば屋】河本徳松は石川県より小樽へ移住</p>	
明治19（1886）年	<p>1月：3県1局を廃止し、北海道庁を設置</p> <p>初代長官に岩村通俊就任</p>	<p>【旧札幌師範学校武道場】北海道師範学校開校</p> <p>【旧菊田家農家住宅】北越殖民社が創立</p> <p>【旧島歌郵便局】島歌（現せたな町）に郵便局を設置</p> <p>【旧浦河公会会堂】赤心社が元浦河教会を設立</p>	旧武井商店酒造部（明治19年頃建築）
明治20（1887）年	<p>1月：札幌で「北海新聞」創刊</p> <p>12月：札幌麦酒会社設立</p>		<p>旧土谷家はねだし（明治20年頃建築）</p> <p>旧青山家漁家住宅・米倉・網倉・外便所（明治20年代建築）</p>
明治21（1888）年	<p>12月：北海道庁庁舎（赤レンガ庁舎）落成</p>		旧青山家漁家住宅・文庫倉・石倉・板倉
明治22（1889）年	<p>11月：北海道炭礦鉄道会社（北炭）創業</p>	<p>【旧平造材部飯場】平忠勝が出身地の奈良県十津川村の洪水被害を契機に北海道へ移住</p> <p>【旧菊田家農家住宅】北越殖民社は野幌に307万坪の払下げを受け、本社を野幌に移す</p>	
明治23（1890）年	<p>8月：「屯田兵条例」を全面改正し、初めて兵役期間を規定する（平民からの採用も始める）</p>		
明治24（1891）年	<p>6月：上川郡東・西永山兵村に屯田兵各200戸が入地</p>	<p>【旧来正旅館】来正策馬が屯田兵として東永山兵村に入植</p>	

	永山兵村の石山伝右衛門、山形県よりハッカ種根を移入し栽培。 次第に北見地方に広がる		
明治 25 (1892) 年	3 月：北炭、夕張炭鉱の採炭を開始 道内の人口 50 万人を超える	【旧広瀬写真館】広瀬写真館の創業者広瀬和左衛門が石川県から岩見沢に移住し明治 20 年代末に旅館経営を始める (10 月)	
明治 26 (1893) 年		【旧小樽新聞社】札幌で月刊雑誌「北海民燈」創刊され、翌年 12 月、日刊新聞「小樽新聞」となる (5 月) 【旧樋口家農家住宅】樋口善右衛門が富山県より札幌へ移住 【旧島歌郵便局】畑野清治が 2 代目郵便局長として任命 (以後 16 年間)	旧龍雲寺 旧菊田家農家住宅 (明治 26 年頃建築)
明治 27 (1894) 年	1 月：新渡戸稲造ら、遠友夜学校を設立	【旧小樽新聞社】小樽新聞発刊 【旧近藤染舗】近藤仙蔵が徳島県から新篠津村に入植し農業に従事	旧浦河公会会堂
明治 28 (1895) 年	3 月：日清戦争に際して屯田兵により臨時第七師団が編成される	【旧納内屯田兵屋】納内屯田兵村にこの年から 2 年間で香川・富山・佐賀等の 20 県から 200 戸が入植 【旧武井商店酒造部】武井松兵衛は酒造兼呉服太物店を開業 (明治 28 年頃)	旧納内屯田兵屋
明治 29 (1896) 年	5 月：第七師団が設置され、屯田兵司令部は廃止される	龍雲寺の境内に鐘楼が設置される【旧龍雲寺】	
明治 30 (1897) 年	5 月：「北海道一級町村制」「北海道二級町村制」公布 11 月：郡区役所制度が廃止され、札幌外 18 支庁を設置 12 月：東京一札幌間に電信の直通回線開通 函館で馬車鉄道運行開始	【旧浦河支庁庁舎】日高国 7 郡を管轄する浦河支庁が設置 (11 月) 【旧信濃神社】河西由造らが寄進し今の場所 (厚別区) に新しい社殿が建てられる 【旧三河本そば屋】河本徳松が「三河本そば屋」を開業	旧松橋家住宅 (明治 30 年頃建築) 旧近藤医院・文書倉 (明治 30 年頃建築) 旧本庄鉄工場 (明治 30 年頃建築) 旧信濃神社 旧樋口家農家住宅 旧河西家米倉 (明治 30 年頃建築)
明治 31 (1898) 年	8 月：北海道官設鉄道として旭川—永山間が開通 9 月：全道的な豪雨のため、石狩川流域を中心に大きな被害	【旧近藤染舗】徳島県出身の近藤仙蔵が近藤染舗を開業 【旧来正旅館】来正策馬が永山駅前に待合所を開業 【旧広瀬写真館】岩見沢の第一号の写真館として広瀬写真	旧武岡商店

		館を開業 【旧武岡商店】武岡清吉が本格的な店舗を建築	
明治 32 (1899) 年	7月：札幌電話交換局設置（8月小樽、10月函館に開設、翌年業務開始） 士別、北・南剣淵兵村に屯田兵合計 437 戸が入地（最後の屯田兵）		
明治 33 (1900) 年	2月：北海道拓殖銀行創立		
明治 34 (1901) 年	9月：北海道毎日新聞・北門新報・北海時事の3紙が合併し「北海タイムス」創刊 道内人口 100 万人を超える	【旧田村家北誠館蚕種製造所】田村忠誠が高知県から入植、4年後に浦臼で蚕種製造所を開業 【旧武岡商店】武岡商店内に郵便局を併設	
明治 35 (1902) 年		近藤清吉が古平で医院を開業【旧近藤医院】	旧島歌郵便局
明治 36 (1903) 年		【旧札幌農学校寄宿舎】札幌農学校の新校舎が落成（現在の北海道大学の敷地）	旧藤原車輻製作所 旧札幌農学校寄宿舎
明治 37 (1904) 年	8月：日露戦争に際して、第七師団に動員命令（後備屯田兵も召集されて実践へ参加） 9月：「屯田兵条例」が廃止（屯田兵制度の廃止） 10月：小樽—函館間の鉄道が全通		旧有島家住宅
明治 38 (1905) 年	東旭川村の末武安次郎、黒田式水稻直播器（タコ足）を完成	【旧北海中学校】北海英語学校は、文部省の設立許可を受け私立北海中学校と改称	旧田村家北誠館蚕種製造所
明治 39 (1906) 年	3月：「鉄道国有法」公布（翌年までに炭礦鉄道・北海道鉄道の国有化が完了） 道内初の百貨店・五番館興農園が札幌駅前通に開業		
明治 40 (1907) 年	5月：札幌農学校、東北帝国大学農科大学となる	【旧札幌停車場】2代目の札幌駅舎が西側半分を焼失したため3代目となる駅舎を新築（10月） 【旧札幌農学校寄宿舎】札幌農学校の寄宿舎が「恵迪寮」と命名	旧大石三省堂支店（明治40年頃建築） 旧札幌拓殖倉庫 旧ソーケシュオマベツ駅通所・主屋（明治40年頃建築）
明治 41 (1908) 年	3月：国有鉄道、青函連絡船の営業を開始（比羅夫丸就航）		旧札幌停車場（3代目）

明治 42 (1909) 年		【旧ソーケシュオマベツ駅通所】ソーケシュオマベツ駅通所開設・駅通業務開始（昭和 9 (1934) 年まで）	旧小樽新聞社 旧北海中学校 旧三ツ河本そば屋・主屋（明治 42 年頃建築）
明治 43 (1910) 年	4 月：北海道拓殖事業 15 年計画（第一期北海道拓殖計画）開始 函館と旭川間を直通列車が運行	【旧有島家住宅】東北帝国大学農科大学予科教師だった有島武郎は同年 5 月から翌年 7 月まで、上白石の家に居住	
明治 44 (1911) 年		【馬車鉄道】札北馬車鉄道運行開始（大正 7 (1918) 年まで）	旧札幌警察署南一条巡查派出所
明治 45 (1912) 年		【旧札幌拓殖倉庫】札幌拓殖倉庫株式会社が設立 【旧札幌農学校寄宿舎】恵迪寮の寮歌「都ぞ弥生」を発表	
明治時代			旧福士家住宅 開拓小屋（明治後期～大正期）
大正初期			旧太田装蹄所 旧渡辺商店（大正前期・1910 年代）
大正元 (1912) 年		【馬車鉄道】札幌市街馬車軌道運行開始（大正 7 (1918) 年まで）	
大正 2 (1913) 年	函館区内東雲町～湯の川間に路面電車開業（道内初の電車）	【旧近藤染舗】二代目近藤瀧蔵は染物業が発展し店舗兼住居を新築	旧近藤染舗
大正 3 (1914) 年			
大正 4 (1915) 年			旧ソーケシュオマベツ駅通所・厩舎
大正 5 (1916) 年	宗谷線（後に天北線と改称）が開通	【馬車鉄道】札幌市街馬車軌道は札幌電気軌道株式会社へ改称	
大正 7 (1918) 年	4 月：東北帝国大学農科大学は北海道帝国大学農科大学と改称 8 月：札幌中島公園などを会場に開道 50 年記念北海道博覧会が開催される 札幌で路面電車開業 11 月：第一次世界大戦終戦	【旧来正旅館】待合所が石狩川の氾濫で浸水被害を受ける 【旧農商務省滝川種羊場機械庫】政府は羊毛の国内自給を目指した「綿羊百万頭計画」を打ち出し、全国 5 か所に種羊場を設け施設が整備され、滝川では翌年から大正 11 年にかけて畜舎・付属舎が建築される	

大正 8 (1919) 年	北海道庁が拓殖計画に国有林の直営伐採事業に加え、木材搬出のため鉄道の敷設に着手（森林鉄道の始まり）	【旧札幌農学校寄宿舎】寄宿舎は南寮 1 棟、2 年後の 10 月には新寮 1 棟が増築され、北側から数えて、新寮、北寮、中寮、南寮の 4 棟に（8 月） 【旧来正旅館】来正旅館開業 【旧山本消防組番屋】今の厚別区山本地区で地区の自衛団が組織される	旧浦河支庁庁舎 旧来正旅館 旧近藤医院・医療棟 旧青山家漁家住宅・主屋
大正 9 (1920) 年	第 1 回国勢調査（道内の人口 2,359,183 人）		旧秋山家漁家住宅
大正 10 (1921) 年	和島貞二、北洋で工船カニ漁業開始		旧農商務省滝川種羊場機械庫
大正 11 (1922) 年			
大正 12 (1923) 年	4 月：戸長役場を全廃し、町村制を施行 （市 6・一級町村 99・二級町村 155 となる） 9 月：関東大震災発生（函館市史によると来道避難民 1 万 1,375 名（9/4～9/29）を数える）		
大正 13 (1924) 年		【旧平造材部飯場】平忠勝は、関東大震災復興に向け木材の需要が増大したことから 1924 年以降、下川町で平造材部を経営	旧広瀬写真館
大正 14 (1925) 年		【旧大石三省堂支店】大石泰三が明治 40 年頃に建てられた建物を購入し親子 2 代にわたり 1955（昭和 30）年まで営業を行う	旧三ツ河本そば屋・石蔵（大正 14 年頃建築）
大正 15 (1926) 年			
大正後期			旧山本理髪店 旧山本消防組番屋 旧小川家酪農畜舎 森林鉄道機関庫 旧平造材部飯場 炭焼小屋
昭和元年 (1926) 年			
昭和 2 (1927) 年	道庁、北海道第二期拓殖計画に着手		

	札幌電気軌道は札幌市営に		
昭和 3 (1928) 年	6 月：日本放送協会札幌局開局	【旧来正旅館】来正旅館の南側に「クロバー」写真館を開業（約 15 年間営業）	
昭和 4 (1929) 年			旧札幌師範学校武道場
昭和 5 (1930) 年		札幌警察署南一条巡査派出所は、個人・企業からの寄付や支援で休憩室・便所を増築	
昭和 6 (1931) 年		【旧札幌農学校寄宿舎】北海道帝国大学農科大学の寄宿舎が予科寄宿舎として今の北区北 17 西 8 に移転・改築	
昭和 7 (1932) 年			
昭和 8 (1933) 年			
昭和 9 (1934) 年	この年、北海道の人口 300 万人を越す		
昭和 10 (1935) 年		【旧来正旅館】待合所を食堂に改造し営業	
昭和 11 (1936) 年			
昭和 12 (1937) 年			
昭和 13 (1938) 年			
昭和 14 (1939) 年			
昭和 15 (1940) 年			
昭和 16 (1941) 年			
昭和 17 (1942) 年	11 月：道内 11 紙が統合されて「北海道新聞」創刊		
昭和 18 (1943) 年			
昭和 19 (1944) 年		【旧武井商店酒造部】強制企業整備令により武井商店酒造部としての経営を終える	